

令和6年度 学校自己評価システムシート(山口学院 埼玉平成高等学校)

目指す学校像(ミッション)	「文武両道」を実践し、新しい時代、新しい分野を切り拓く心豊かなリーダーを育てる進学校
本年度の重点目標	1 学習力の強化 （授業を大切にする取り組み、学習時間の定着、資格取得の強化） 2 進学指導 （指定校入試依存からの脱却と公募制推薦や大学入学共通テスト受験を見据えた授業） 3 部活動・生徒会活動の充実 （リーダーの育成、生徒主体の生徒会活動、部活動の強化） 4 教員研修 （外部研修、校内研修の実施、授業の充実） 5 募集活動の効率化と学校の魅力を積極的に広報する戦略の立案

評価	達成度
A	ほぼ達成(8割以上)
B	概ね達成(6割以上)
C	改善の兆し(4割以上)
D	不十分(4割未満)

＜自己評価委員会＞	
学校関係者	3名
内部委員	15名

学 校 自 己 評 価								学 校 関 係 者 評 価	
年 度 目 標					年 度 評 価 （ 2 月 1 0 日 現 在 ）			実施日:令和 7年 2月 18日	
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	評価指標	経過・達成状況	達成度	次年度の課題と改善策	学校関係者からの意見・要望・評価等	
1	(学習力の強化) 「自ら主体的に学ぶ」の実践を通じて、「これからの激動の社会を自分で考え、生き抜く力」を生徒につけさせたい。 授業においても、生徒が自ら課題を見つけその解決にあたる能動的な学びを重視したい。その一方で、上記を行ううえで素地となる基礎学力や学習習慣の確立が未熟な生徒も少なくない。 多くの場面で、Google ClassroomやChromebookなどのICTが活用されるようになった。しかしその使用効果には、教員・生徒ともに個人差があり、日々変わる最新技術への対応も、現状では個人に委ねられている。 「英語4技能」の取り組みと同時に、英語検定にも力を入れているため、6割の生徒がいずれかの級を取得している。その一方で数検・漢検では受検者が少ない。受検をさせることにより意欲的に知識・技能を深めさせる。	『教わる』から『学ぶ』へ 自己課題への意識的な取り組み 授業への意欲的な参加 学習時間の確保 学習習慣の確立 ICTの効果的使用 検定試験の積極的受検	・生徒自身の考えをしっかりと発言できる授業を展開する。 ・生徒が興味関心を持つことができる授業展開を心掛け、自ら学ぶ意識を持たせる。 ・個々の生徒に自分の弱点、課題を見つけさて、自らその解決に行き着けるよう導く。 ・自学の計画を立てさせ、継続的に取り組ませ習慣化させる。 ・ChromebookやGoogle Classroomを活用し、学習効果をより向上させる。 ・英検などの資格試験対策とその結果の分析と活用を引き続き行い、英検に関しては準2級以上の全員取得を目指す。 ・数検、漢検については授業内に限らず各学年での声掛けの徹底をする。	・積極的な発言等が見られたか。 ・生徒が自分自身で課題を見つけ、その解決策を考え出せたか。 ・基礎を大切にし、予・復習を欠かさずに行っていたか。 ・ICTを授業などで効果的に使用できているか。 ・生徒全員の検定試験で級の取得 ・検定試験の準2級以上の取得 ・受検者数、また取得者数が増加したか。	・生徒が挙手をして発言をすることも然ることながら、グループワークやプレゼンテーションの場面では、生徒を主とした授業が展開され、活発な発言が見られた。 ・探究科目やプレゼンテーションでは、生徒自らが課題やテーマを設定し、その調査・研究を進め、1つの結論まで到達することができた。 ・Google Classroomで課題を配信し、また提出させる方法が定着したことで教員は生徒の学習状況をより具体的に把握できるようになった。また、生徒もChromebookを活用し、意識的に課題を通じて予復習に励んでいた。また、その波及効果で、隙間時間を学習時間に充てようとする生徒が増えてきた。 ・授業におけるICT機器の使用は、定着し様々な科目、多くの教員が実践している。 ・英検に関しては、全校受験を継続実施しており、今年で13年目となった。英語の授業内外で対策を行い、準2～2級の合格者を順調に出している。英検の級やスコアを大学入試に活用できることから、生徒の英検に対する意識も高まっている。	A	・グループワークやプレゼンテーションを取り入れた授業の取り組みは、他校の実践事例も積極的に調査・研究し本校の取り組みをさらに拡充させていく。 ・教科横断型の探究課題やプレゼンテーション、また高大連携、企業連携など本校ではまだ実践できていないことを導入できるよう検証・検討し生徒の自己課題への意欲的な取り組みを一層推進する。 ・ChromebookやGoogle Workspaceの活用方法は、教員間で継続的に情報交換また研修などを行い、生徒の効果的な学習の質の向上を常に図る。 ・教材に関して、デジタル教材の導入に対応していく。 ・英検の合格率が向上するよう毎週全校で実施している英単語テストに対する生徒の意識づけを、今後も全教員を上げて行う。 ・漢検、数検に関しては、その意義や重要性を、授業外でも生徒に説明し、受検に対する意欲を高める。	・グループワーク、プレゼンテーションを取り入れた授業は時代的にも当然の事であり、今後も積極的にすすめてほしい。 ・ICT教育に関しても同様で、今後も研鑽をつみ、研究を重ねて欲しい。 ・「埼玉平成で何をするか」という目的意識があるかどうかすべて。生徒ひとりひとりがどういう目標設定をしているか、どんな未来を描いているかがわからなくてはいけない。 ・情報処理部が設置されたとのこと。ぜひそこにも生徒の力を取り入れて欲しい。「生徒が作ったホームページ」「生徒が運用するSNS」など。 ・生徒に任せることが大切。教師が変わらなくてはいけない。 ・漢検、数検はもう少し受験者が増えて欲しい。	
2	(進学指導) 進路希望調査の結果にも顕著だが、2年次後半、あるいは3学年になってからも希望進路を具体的に打ち出せない生徒が少なくない。そうした生徒は「入れそうだから」「家が近いから」「親が言っているから」など、安易な理由で学校選びをしてしまう事が多く、非常にもったいなく感じる。したがって、『進路の日』や各種ガイダンスを核とした日常的な進路への意識づけを行い、生徒が「行ける学校」ではなく「行きたい学校」を早期に見発できるようにする。 昨年度の大学・短大・専門学校への進学率は約90.1%であった(大学69.4%・短大3.3%・専門学校16.9%)。しかし、大学進学者の66.7%が学校推薦型選抜(指定校)での合格であり、残念ながら国公立大学への合格者は	進路室の充実 各クラスへの情報提供 『進路の日』 各種ガイダンスの充実 一般選抜や大学入学共通テスト受験への指標となるような各種データの整理と	・生徒の目に触れるところに情報があること、あるいは生徒がどこに行けば有益な情報があるかを知っていることは非常に重要である。したがって、進路室周辺を常に整備して最新の情報を提供するとともに、高校生が興味関心を持てるよう心がける。 ・進路行事が特定の学校の宣伝で終わらないようにし、オープンキャンパス等で実際に自分の目で学校を見ること、リサーチを重ねさまざまな学校を比較検討することの大切さを知ってもらう。 ・大学進学者の在学中のデータを入試形態別に分析し、その結果と紐づけて、指定校推薦に限らず多様な進路選択ができるシステムを構築する。	・生徒が本校を卒業する際に、どれだけ納得のいく進路活動ができたか。どれだけ自己実現ができたか(進路指導への満足度)。 ・近隣の学校、指定校枠がある学校に限定されず、多様な学校選びができているか。 ・「チャレンジする入試」への進路指導に向かうにあたって、有用なデータが作成できたか。	・3年生の進路活動については、おおむね本人たちの納得のいくような形に決まりつつある。希望を高く持ち、チャレンジする生徒も目立つようになってきたが、まだ希望自体が控えめな生徒もいる。 ・『進路の日』や各種ガイダンスでは、生徒たちも積極的に関わり、自分の進路の可能性を探る動きが見られた。 ・個々の指導にあたっては、卒業生の経験やデータを活用される場面もあった。	B	・より高い目標を設定することの重要性を生徒に浸透させていく必要がある。 ・『進路の日』などの行事は有効なので、さらに「チャレンジ」のために希望と自信を与えられるガイダンスなどを打っていきたい。 ・模試のデータを活用するのみならず、模試のデータも指定校推薦に活用することで、学校内だけに意識をとどめさせない指導をしていく。	・国公立大学の数字が物足りないように思う。まずは受験生を増やすことが大切なのではないか。 ・それには生徒だけでなく、保護者の理解も必要である。受験は家族でするものだとすると、保護者にも情報を出し、理解を求めてみてはどうか。	

	1名(群馬県立女子大学)という結果に終わった。進学実績の向上を実現するための昨今の課題は、指定校に頼った進路選択からの脱却である。また、新たな指定校枠を獲得していくためにも、一般選抜はもちろん公募制推薦や総合型選抜での合格者を増やしていく必要がある。また、漫然と受けている者が少なくない模試を全生徒が真剣に取り組み、難関校の一般選抜にも対応できる「真の学力」を養えるようにするため、推薦と模試の成績の紐づけをしていきたい。	分析、授業展開 本校生徒の実情に合った模試の選定と、受験に向けての意識づけ	・大学入学共通テストに顕著のように、近年の入試はより実生活に活かされるような、問題読解がカギとなる傾向に大きくシフトしつつある。各教科の授業においても知識偏重となるのではなく、生徒に出来る限りアウトプットさせ、思考力や表現力を養える授業を展開する。 ・模試の結果から同世代における立ち位置を認識させつつ、国公立大学を筆頭に難関大学も総合型選抜を含め可能性が大いにある事を認識させる。	・大学入学共通テスト受験の意義を認識し、実際に受験する生徒はどのくらいいたか、またその結果はどうであったか。好成績を残した生徒にとって、普段の授業がどれくらい役に立ったのか。 ・難関校の総合型選抜受験者がどのくらいいたか。「推薦を受けられないから総合型」というのではなく、あくまで前向きに挑戦した生徒についてリサーチする。	・大学入学共通テストを受験する生徒は今年度も全体の10%程度であり、まだまだ少ない。ただし、1・2年生には担任や進路指導部を通じて一般入試に心を向ける重要性に関する指導を強化しており、生徒の意識も高まりつつある。 ・「行ける大学」の総合型でなく、「行きたい大学」の総合型を受験する生徒も目立つようになってきた。ただし、国公立など年をまたぐ覚悟が必要な受験に向かう生徒はまだ少ない。	・模試を日頃の進路指導に積極的に取り入れることで、漫然と受験することを防ぎ、「最終的には共通テスト・一般入試へ向かう」という心構えを付けさせたい。 ・「チャレンジ」するためには最終的に一般選抜からも逃げないことを理解させるとともに、そこで戦える基礎的学力を常に確認させたい。	・卒業生を使った進路行事など、工夫がほしい。
3	(部活動・生徒会活動) 全校生徒加入制を取っているが昨年度より希望加入制の導入について検討を進めている。実態とクラブ活動の活性化についての両立を図った上での良い運用方法を来年度に向けて模索する必要がある。 生徒会活動は長期的視野を持ちながら継続的な活動を目指している。そのために生徒会本部役員のみならずリーダー研修会などを開催し、学校全体のムーヴメントとなるよう計画的な活動を目指したい。 (自治活動) 委員会活動等を通して、それぞれが生徒の一員であることを自覚できるようにしていきたい。現状は委員会活動が活性化されておらず、所属感が得られていないという課題がある。そのため、簡単なことから活動を増やしていくことが課題である。	・部活動の存在意義について考える機会の創出 ・生徒会本部役員で計画していることの思いや意図が多くの生徒に伝わっている。 ・年間を通して委員会活動が行われているか。	・各部活動の活動状況、生徒の参加状況などを把握する。また、活動の少ない部の生徒が活動日以外にどのような時間の使い方をしているかを調査する。 ・リーダー研修会などを通して意見の交換が活発に行えるよう指導する。 ・生徒会クラスルームを活用し、細かな情報を全校生徒へ発信し、共有していく環境を構築する。 ・リーダー研修会を通して、各委員会の長に活動を促していく。 ・ガントチャートを用いて実施していることの見える化を図る。	・全校生徒加入制の正確な現状をアンケート等を通して把握することができたか。 ・全校生徒が生徒会活動として行なっていることを把握できているか。 ・各委員会の活動が昨年度よりも開かれ、活動に結びついていくか。	今年度は、部活動、生徒会活動、委員会活動において、生徒たちの主体性を引き出すことを目指し、様々な取り組みを実施した。 ・部活動においては、希望加入制の導入を決定し、来年度より全校生徒加入制からの転換を達成することができた。この取り組みにより、生徒一人ひとりが自身の興味や意欲に基づいて活動を選べる環境を整えることができた。 ・生徒会活動では、リーダー研修会を定期的を実施することで、生徒間の意見交換の場を設けることができた。この取り組みを通じて、球技大会の開催やその他のイベントが実現し、多くの生徒が積極的に参加するきっかけとなった。また、生徒会クラスルームを活用した情報発信の基盤も整い、生徒会活動が全校生徒に少しずつ浸透しつつある。 ・委員会活動については、活性化を目指して様々なアプローチを試みた一年であった。一部の委員会では活動の進展が見られたものの、全体としての活性化にはまだ課題が多く残されている。ガントチャートを活用した計画的な取り組みやリーダー研修会を通じたリーダーシップの育成が進行中であり、これらが徐々に効果を上げている状況である。	A ・来年度から実際運用していく上で活動が低調な部への具体的な支援、同好会等の普及など生徒が様々な場で有意義な学校生活を過ごせるよう、新しい機会の創出が今後の課題として残った。 ・生徒会活動に対する全校生徒のさらなる関心の喚起や、長期的視点での活動の継続性確保には、依然として課題が残されている。 ・委員会活動については、各委員会の連携を強化するとともに、生徒たちが小さな達成感を積み重ねられるような仕組みを整えることが重要である。今年度の成果と課題を踏まえ、来年度以降も継続的に改善を進め、生徒たちが主体的に活動を楽しめる学校づくりを目指していきたい。	・リーダー研修会はとてもいい試みであった。 ・生徒会が主催した球技大会も素晴らしい試みである。このような行事に携わった生徒たちに対する社会的能力の育成にもつながっている。 ・今年の生徒会の改革はめざましいものがあった。テレビ企画への強力は強烈なインパクトを残した。メディアの発信力は大きく、上手に生かしてほしい。 ・埼玉県を代表する部活動も多くある。もっと積極的にPRできないだろうか。もったいない。 ・部活動の自由化は時代の流れのうえでは当然のことであるが、同好会が少々心配である。自由のなかにも教育機関であることを考え、教育上望ましくない同好会は規制すべきなのではないか。
4	(教員の研修) 日頃から生徒の学習状況に応じた指導をを心がけている。 通常の教材研究に加え、ICT機器を効果的に取り入れた授業の構築のため試行錯誤を繰り返し、授業の質の向上に努めている。 また、授業の相互参観による意見交換や入試の情報分析の情報共有を行っている。	教科間の研修、外部研修会への参加。	・授業力向上のために、外部研修に積極的に参加する。 ・相互授業参観を随時実施し、自身にないスタイルを身につけ、授業の質の向上を計る。	・外部研修に関する情報を共有し、積極的な参加と、事後の情報共有ができたか。 ・相互授業参観など、教科内で研修や意見交換を行えたか。	・授業の相互参観は少なかったが教員間、また教科間での意見交換や情報共有が活発に行われていた。 ・ChromebookやGoogle Classroom、Google formsの活用法に関して、教員同士で研究・実践し、そのノウハウを積極的に共有していた。その結果、授業や業務の円滑化を図ることができていた。	A ・ICTは日々進歩しているので常に最新のツールや使用法の情報を収集し、導入に向け検証・検討を重ねていく。 ・外部の研修会への参加、また他校の見学などを積極的に推進していく必要がある。	・先生方にもっと勉強する機会を与えて欲しい。 ・内部の研修よりも、外部の研修のほうが実りがあるのではないか。 ・外の世界を知ることが大切である。
5	(募集活動) 入学者数は258名にとどまり、募集定員を大きく下回った。(92名定員割れ) 生徒募集の数値目標を以下のように設定し、その実現に取り組む。 ・志願者数目標 1,500名 ・入学者数目標 350名 ・中学・塾回り 延べ 2,000教室	定員確保を最重要課題とした生徒募集、広報活動	・中学、塾への訪問やHP,メール等を通じた、本校の情報提供の回数の増加。 (SNSなども積極的に開設し、利用する) ・入試目安や特待制度、試験の内容を見直し、中学生が受験しやすい状況を作る。 ・中学生とその保護者に、より本校に興味、関心を持ってもらえる募集行事の企画・実施。 ・HPの継続的な改良。投稿・更新頻度をあげる。 ・在校生が活き活きと活躍している様子をPRするために在校生自身が中学生とその保護者が関われる機会を増やす。	・中学・塾への訪問回数 ・HP、メール等での情報発信数 ・募集行事への参加数 ・北辰テストの志願者増 ・入試志願者の延べ数 ・入学者数	・スーパーサッカーの入学者を昨年度より約20名ほど増やすことができ、単願者の増加に繋げることができた。しかし、推薦入試の受験者数は昨年度と変わらない数となり、目標定員である350名の達成には厳しい状況である。 ・単願の成績奨学生にCを追加、来年度の特進コース入学者は英語と数学で習熟別授業を導入するなど、特進コースに向けた取り組みを考案した。 ・昨年度に引き続き、個別相談にPCを導入するなど、募集行事の運営そのものの精度、完成度は年々良くなっており、来場者アンケートでも来場者の満足度は毎回高かった。 ・SNSを昨年度よりも更新回数を増やし活用することができた。Instagramのフォロワーを1年で約350増やすことができた。	B ・「埼玉平成に入学すればこんな高校生活を送ることができる」、「〇〇を学ぶなら埼玉平成」といった、学校のブランド化を確立させ、本校の特色を明確にする必要がある。 ・本校に足を運んでももらえるよう、ホームページや紹介動画、SNSをさらに充実させ、本校をPRしていく必要がある。	・様々な改革を外部に発信して、「埼玉平成は変わった」ことをアピールして欲しい。 ・学校無償化の流れが加速する中、「選ばれる学校」にならなくてはいけない。 ・他との違いをどうアピールするか。 ・デジタル化が進んでいるなか、写真部や(今は無いが)新聞部など、生徒の力を利用して外部に発信して欲しい。生徒募集にもつながると思う。